

平塚で歴史上有名な人物を女性に限って挙げる、その実在が史料的に確認できる人物に「虎女」がいます。「虎女」が実在の人物とする根拠は、「吾妻鏡」建久四年(1193)六月一日の条に、虎が曾我兄弟の仇討ちに関与していたかどうか、尋問されていたことが記載されているからです。



「曾我十郎と虎」の物語として広く知られています。真名本「曾我物語」(以下曾我物語)は、兄弟の仇討ちとともに、「巻の五」以降は、十郎と虎の馴れ染めにはじまり、宿願の告白、名残、虎の出家、虎の回國修行、兄弟一周忌の法要、虎の善光寺詣、三回忌法要、井出の屋形訪問、虎の大往生といった虎女の物語としても後代に伝えられています。そして、その過程で多くの伝承が全国各地に生まれました。そこで、数ある伝承の中から、平塚市近辺の虎に関わる伝承史跡を幾つか紹介してみましよう。

山下長者屋敷(やましたちやうじやしき)
この長者屋敷は、虎女誕生の館と伝えられるところだ。「曾我物語」では、虎の母は平塚宿の夜叉王、父は宮内判官家長と記述します。宮内判官家長は、平治の乱(1159年)により都にいられなくなつて鎌倉に落ち下り、海老名源八権守季貞を頼つて身を寄せていた折に、平塚宿の夜叉王という傾城のもとへ通い女子を儲けました。寅の年の寅の日の寅の時に生まれたので、その名を「三虎御前」と名づけた、と虎の出生を物語ります。

長者の意味は、一群の人々のうちで、かしら立った者、「長」となる者をいい、また有徳人・裕福者を一般に長者と称しています。山下長者が、氏上に由来する「氏長者」、芸能の

虎の旧跡を尋ねて

(文責 平塚市博物館館長 土井 浩)



山下長者屋敷跡

から「宿の長者」「遊女の長者」をいうのか、また山下長者屋敷を虎の父宮内判官家長の館とも伝えていますが、はっきりしたことはわかりません。

虎草庵跡

「曾我物語」では十郎亡きあと、19歳の虎が花の袂を改めて濃き墨染に替える虎の出家を建久四年九月八日とし名も禪修比丘尼と改めた、とあります。この日は、十郎・五郎の百箇日にあたりました。また「吾妻鏡」建久四年六月十八日の条には、「故曾我十郎が妾(大磯の虎、除髪せずといへども、黒衣の袈裟を着る)、亡夫の三七の忌辰を迎へ、箱根山別当行実坊において、仏事を修す」とあつて、同じく虎の出家を記述します。



虎草庵跡

出家後の虎は、高麗寺に草庵を結び幽居すると伝えられ、

その庵跡は地蔵堂とあります。

また草庵は、山下長者宅跡の傍にあるとも伝えられます。この場所について「新編相模國風土記稿」(以下「風土記稿」)



地蔵堂(現慶覚院)

は、高麗寺山下なるが故、地名となったことから「曾我物語」にいう草庵の場所もこの地ではないかと推定します。

文塚(ふみづか)

山下の地に草庵を結んだ後、虎は十郎祐成から送られた虎宛の手紙を焼き、その焼いた場所を文塚と伝えます。「風土記稿」では、この文塚を「村民宅地にあり、今は崩れて小社を建つ、(玉章明神と唱ふ)、虎女祐成が贈りし文を埋めし所とぞ、また此のあたりに「灰塚」の字あり、彼の文を焼きせし跡なり」と記述して、手紙を埋めた場所を文塚、焼いた場所を灰塚としています。

「曾我物語」に、十郎祐成が虎に手紙を送る記述はありません。しかし仇討ちのため曾我の屋形を出立した日と、仇討ち当日に母宛に書いた十郎の手紙が形見として虎に贈られる、とあります。

虎が石(とらがいわ)

大磯の延台寺には、十郎祐成の「身代り石」とされ、石面に鎌痕の残る奇石があります。その由来を「風土記稿」は、「その昔十郎祐成、遊女虎が許に通いし夜、怨嫉の者遠矢をもつて射たりしかど、此の石その所に飛到り、その矢空しく石に中たりて、祐成恙なかりしかば、虎奇として歎び、深くこれを愛玩せしとぞ、彼が遺愛の石なるをもて、虎子石と称すと伝ふれど信じ難し」と記述します。



虎が石(延台寺)

幼名を一万といつた十郎が元服して継父の片名(名前の一字を取り、曾我十郎祐成と名乗る十三才の時、「曾我物語」では仇討ちに関する幾つかの挿話を載せています。その中の一つに「胡の深王は母を虎に喰われて御年十五歳と申すに始めて虎狩をし給いつつ、秋陽苑と云ふ野原を廻られける時、虎に似たる石あり。朧月夜の事なれば母の敵の虎ぞと思ひてこれを射る程に、左右なく(難なく)射通してけり、寄せ合せて(近寄つて)矢を抜かむとすれども抜かれざりけり、不思議の念をなしてよくよくこれを見れば石なりけり。希有にして(やつとのこと)この矢を抜き我が弓

勢(弓を射る強さ)は勇しかりけるものかな」と思ひて、その後またこれを射けれども通らざりけり。親の敵の虎と思ひて射ける時は心も武くして石も射通したけれども、石ぞ思ひて心の絶(弛)む時は通らざりけり。その後敵の虎を狩めぐらして(捜しもとめて)取り給いけり承る」とあつて、「虎が石」の伝承が生まれる類似説話を載せています。

その他の虎伝説

この他、虎に関わる伝承として、高根にある莊嚴寺本尊地蔵は「虎の持念仏」と伝えてあります。



化粧坂と化粧井戸

別名「虎子釜」と伝えてあります。虎が化粧するさい使用した水を汲み上げた井戸が化粧坂にあり、化粧井戸が伝わります。「曾我物語」に、「十郎は虎のもとへ一月に四、五度、十度も通いぬらむに、(虎は)一度も嫌妨気なる気色(嫌な顔)を見ざりつる」と記述します。この十郎の虎への思いが「泡多羅山(湘南平)の伝承を生むことになりました。十郎は虎のもとへ山越えの道を急ぎ通います。大磯の宿を見下ろす山に辿り着くころ駒は泡を垂し下す。泡多羅山にはこの他、五郎が強く踏みしめた足痕から清水が湧き出たとされる「硯水」があります。大磯の善福寺の開山了源は、十郎祐成の子という伝承も生まれます(「大谷遺蹟録」)。

曾我の仇討ちは、周知のように真名本をはじめ、各種の曾我物語が作られ長く後代に伝えられます。虎はその物語の中にあつて、象徴的な存在として扱われ虎御前の語りとして展開します。そして、「曾我物語」は、女語りとして哀れさを深め、広く民衆に受け入れられることになりました。そのことが虎に纏わる伝承が生まれる力となり、多くの虎旧跡を創り出すことに繋がった、と見る事ができます。